

令和元年度中学校武道授業(少林寺拳法)指導法研究事業



指導法研究の様子

令和元年度中学校武道授業(少林寺拳法)指導法研究事業(主催=日本武道館、少林寺拳法連盟、日本武道協議会、後援=スポーツ庁)が8月24日~25日の2日間、東京・大塚の少林寺拳法東京研修センターで研究者3名、研究協力者3名、連盟本部事務局1名が出席して実施された。

本研究事業は平成24年度から完全実施された中学校武道必修化の充実に向け、短時間で効果のある教材作りを念頭に置き、現行学習指導要領に準拠した年間8~10時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道授業(少林寺拳法)指導法の研究をするものである。

■ 1日目(8月24日)

◇ 開講式

はじめに三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶に立ち、「中学校武道必修化は8年目を迎え、2年後の新学習指導要領には武道9種目が並列明記されます。また、本年度はスポーツ庁が外部指導者を活用した複数種目モデル実践校の予算・事業化を図りました。外部指導者を広く活用し、複数種目を実施することによって、採用種目の幅が広がり、少林寺拳法にとって



三藤 芳生
常任理事・事務局長

も実施校を増加させることができるチャンスとなります。

中学校武道必修化により、立派な中学生を育てることが最も重要であり、それが学校教育の目的でもあります。安全で楽しく、“少林寺拳法をやってよかった”と中学生が思えるような指導法を研究していただきたいと思います。

本研究事業や全国指導者研修会の成果は、少しずつではありますが中学校武道必修化に反映されてきています。現場の役に立つ指導法をしっかりと研究し、2日間が充実したものとなるよう期待しています」と述べた。

続いて、研究者を代表し、中島正樹少林寺拳法連盟中学校武道必修化プロジェクト委員会委員長が挨拶に立ち、「2年後の新学習指導要領実施を控え、学校現場からも質問が増えてきており、今まで以上に現場目線で考



中島 正樹 委員長

える必要があると思っています。具体的には、少林寺拳法における課題解決の為の合理的な学習とはどのようなものなのか、運動が苦手な生徒や意欲的でない生徒にどのように教えるか、障害の有無に関わらず仲間とともに学ぶ共生社会への道についてどう答えるか等です。それぞれの研究成果を共有し、具体的な形で示せるよう協議していきたいと思います」と述べた。

◇実践報告

開講式後、場所を道場に移して各研究者による実践報告が行われた。まず小井寿史研究者が、『少林寺拳法の動きを取り入れて脳機能を高める脳科学の活用』について、脳を鍛える有効な運動として、①有酸素運動、②デュアルタスクを提示した。有酸素運動について「血流が良くなり、脳に酸素や栄養が多く運ばれる。それと同時に脳神経のネットワークの構築が進み、脳が活性化される」。また、「音楽に合わせて突き、蹴り、受けを行うことにより、20分～30分程度の有酸素運動となる」とした。また、デュアルタスクについて「複数の動きを同時に行うことにより、脳を刺激し、楽しみながら脳の活性化が図れる」とした。



次に連盟本部職員秋元宏介氏が外部指導者としての立場から『受け身指導』について発表した。「身体の安定、不安定な状態を感じ、遊びの要素を交えながら受け身の習得に繋げていく。心地よく転がりながら授業で受け身を習得させることにより、日常生活での転倒予防などに生かせればよい」とした。

続いて、中島正樹研究者が、新学習指導要領に基づく柔法剛法指導として『指導と評価の計画例』について発表した。全員で様々な動きを体験しながら、指導方法、指導内容、指導上の留意点等について検討協議した。

◇実践研究・事例研究

昼食後は場所を大会議室に移し、まず岡部好孝研究協力者（盛岡中央高等学校附属中学校外部指導者）が昨年度実施した授業について、授業で生徒に対して行った講話（「拳禪一如」、「力愛不二」、「自他共楽」、「守主攻従」、「剛柔一体」等）を再現する形で報告した。「少林寺拳法の“技術”よりも“教え”を中心に授業をした。実際に“技

術”を使うことは滅多にないが、“教え”は日常生活の様々な場面ですぐに生きる」とした。

次に末澤和士研究協力者（多度津町立多度津中学校教諭）が多度津中学校における少林寺拳法授業の報告を行った。「学年に応じた内容を指導することが重要。また、上の学年、高校生になったときに“また少林寺拳法をやりたい”と思わせるようにできる指導を心がけた」と述べた。

その後、田中豊研究協力者（香川県立盲学校長）が『多様性を認め合う少林寺拳法授業の可能性』について、特別支援教育の現状、発達障害の説明をした。発達障害について、「指導者側が知識を持ち、生徒の実態を把握、分析し、状況に応じた指導を行うことが必要である。また、長所・短所を捉え、生徒の多様性を認め、可能性を信じ、真摯に関わるのが大事である」とした。

■2日目（8月25日）

◇指導法研究

高坂正治研究者が『少林寺拳法の特性と課題』について、「知識（教え）の指導については、テーマ・技・講話を一致させ、日常生活の言葉を用いて示すことが重要。物事の見方・考え方、人間関係のあり方について、少林寺拳法を通じて学ばせたい。技能の指導については、準備運動は基本動作に繋がるような動きを、基本動作は単独演武や法形に繋がるように心がける。また、身体の使い方を分かりやすく説明しながら体験させることにより、より理解が深められる」と報告した。

◇閉講式

研究者代表挨拶を中島研究者が、主催者挨拶を中島昭博日本武道館振興課長がそれぞれ行い、指導法研究事業の全日程を終了した。

